

タイトル	日本の人事政策の起源：江戸幕府後期御家人の人材登用と昇進
著者	石井，耕；ISHII，Kou
引用	北海学園大学学園論集(156)：1-27
発行日	2013-06-25

日本の人事政策の起源

——江戸幕府後期御家人の人材登用と昇進——

石 井 耕

1 問題提起

日本の人事政策の起源は、江戸幕府後期の人事政策とくに人材登用と昇進にあるということが、本稿で提示する主張である。ここでいう人事政策は、現在の言葉でいえば、ホワイトカラーの人事政策である。

「東洋文庫」の中に、田辺太一（やすかず）の『幕末外交談』が収録されている。幕末から明治にかけての日本の外交を担った人物の懐古談である。開国論の立場に立ち、その都度の外交の意思決定についての評価が述べられている。

そのなかで、幕臣三傑として、岩瀬修理（忠震）、堀織部（利熙）、永井岩之丞（尚志）を取り上げている。「堀が沈毅で守（みさお）あり、永井が温和直諒（謹直）で徳あり、岩瀬が英果聰敏で識あることは、早く（阿部）伊勢守正弘の鑑定（めがね）にかない、未だ部屋住み（父兄が戸主で、その厄介になっているもの）の身でありながら、また父よりも官の高いことが許されない時代に、その仕来りを破ってこれらを登庸し、目付の要職につけたのである。そして、堀は蝦夷地（北海道）開拓、北門の鎖鑰に任じ、永井は長崎にあつて海軍伝習のことを督し、岩瀬は幕廷にとどまって政務を司ったのである。」

（田辺太一は、同書の別箇所、福地源一郎の言う「幕末の三傑」を取り上げている。岩瀬肥後守（忠震）、水野筑後守（忠徳）、小栗上野介（忠順）である。岩瀬は「幕臣三傑」と「幕末の三傑」の両方に名前が挙がっている。水野も学問吟味天保9年乙科及第である。小栗はそうではない。）

堀織部（当時は省之助）と岩瀬修理（当時は愿三郎）は、学問吟味天保14（1843）年乙科及第である。永井岩之丞は、学問吟味弘化5（1848）年甲科及第である。いずれも、昌平坂学問所の優秀な出身者であり、高い能力を評価されたのである。（堀と岩瀬は、大学頭林述斎の孫でもある）

田辺太一自身も、永井岩之丞と同じく学問吟味弘化5（1848）年甲科及第である。御家人田辺新次郎の二男であり、「厄介ニテ外国奉行支配調役、同組頭、歐羅巴へ行」（「昌平学科名録」と、厄介でありながら、高い能力を評価されて、幕府外交の重要な役割を担うことになるのである。（田辺太一は、及第当時は田辺定輔といい、兄の田辺孫次郎も同年の乙科及第であった。孫次郎は、講武所の砲術教授方となるが、文久2年42歳で歿している。父田辺新次郎は、学問所の教授方出

役として、長く勤務した。)

「欧羅巴へ行」とは、文久3(1863)年の池田長発(安政3年乙科及第)を正使とする幕府遣外使節であり、フランスから歴訪する予定だったが、予定を中断して元治元(1864)年帰国した。『幕末外交談』によれば、「横浜鎖港の行われ難いことを知り、死を決して廟堂に鎖港の非を訴えようと、無断で帰朝し、江戸入府を強行したが、使節は知行を削られた上、御役御免、蟄居を命ぜられ、太一もために免職、閉門に処せられた。」また、田辺太一は慶應3年の徳川昭武の遣仏使節団にも随行している。(渋沢栄一も使節団の一員であった)

のみならず、田辺太一は、明治4年の岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文らの遣外使節団の書記官長ともなるのである。

江戸時代は、身分制の強固な時代といわれるが、江戸幕府の人材登用のあり方を見ると、19世紀以降は大きく変化している。直接には、老中阿部正弘のように、重大な外交の局面に立ち、人材登用に迫られたという要因が大きい(阿部正弘は、天保14(1843)年老中首座、安政4(1857)年死去)。しかし、それだけではない。松平定信の寛政改革によって、昌平坂学問所を官学と定め、その出身者に学問吟味を実施したことが背景となっている。学問吟味の及第者を、積極的に登用し、重要な施策にあたらせたのである。また、その背景に、江戸後期の幕府・藩において「文書主義」が浸透し、文書能力が問われるようになったこともある。社会移動を伴う能力発揮の機会の端緒ともいえよう。

田辺太一のように、御家人出身で厄介(二男)であったものが、昌平坂学問所で学び、学問吟味に及第することによって、二度もヨーロッパに派遣される重要な役割を担うことになるのである。学問、試験、登用が連続しており、身分の上下に関わらず、重要な職務を担うことになるのである。明治以降の日本においては、学問、試験、登用の連続した過程は、一般化し、官吏、軍人、会社員いずれもが、その過程を経て、重要な職務を担うこととなる。学校教育、試験を経て登用された人材を、組織内において長期的な昇進と選抜を行う仕組みである。今日においても、この仕組みの基本は変化していない。これらは、メリトクラシーと言われている。日本語でいえば、能力主義である。

そもそも、メリトクラシーとは、アリストクラシー、ブルトクラシーに対比される用語である。マイクル・ヤングの『メリトクラシー』(1958)によれば、「生まれつきの貴族の支配でも、富豪たちの寡頭政治でもなく、才能ある人びとによる真のメリトクラシーの支配なのである。」生まれつきの貴族による支配がアリストクラシー、富豪たちの寡頭政治がブルトクラシーである。アリストクラシーの時代は長く続き、「階級ごとに、身分ごとに、職業ごとに、息子は忠実に父の歩んだ道に進み」、その道を外れることはなかったのである。ヤングは、イギリスの1870年代以降、文官職への競争試験への登録が通則になったことをもって、メリトクラシーが広がりを見せたことを指摘している。メリトクラシーという用語自体ヤングの造語と考えられるが、その意味は、教育制度としては成績第一主義(あるいは学歴主義)、社会形態としては能力主義(あるいは実力

主義) 社会, 原理としては能力主義を指す用語として使われている。

竹内 (1995) は、マイクル・ヤングを引用し、イギリスの 1870 年代を、メリトクラシーの開幕としている。そして、多くの社会学者・教育史学者の見解はそうなのだが、「日本のメリトクラシーの開幕は文官試験試験補及見習規則 (勅令第三十七号) が公布された 1887 (明治 20) 年である」としている。これは、試験に向けての教育とは、明治以降の教育、さらに言えば西欧伝来の教育に基づく、という前提が立てられているからである。(竹内の研究は、明治以降の日本のメリトクラシーの研究において、標準となっている)

明治以降のメリトクラシーについての分析は多数存在する。明治の言葉で言えば、「立身出世」である。「立身」とは、儒学に依る武士の世界での用語であり、具体的には「知行の加増」を指していた。一方、「出世」とは、仏教に依る町人の世界での用語であり、具体的には「家産の増加」を指していた。

だが、本稿で主張したいのは、明治の「立身出世」には、その起源があるということである。それが、江戸幕府後期の人事政策なのである。昌平坂学問所の官学化 (1797 年) から明治維新 (幕府瓦解, 1868 年) まで、およそ 70 年間の長きに亘って実施された人事政策なのである。もちろん、起源であって、そのことが、社会全体に広がっていたわけではない。しかし、明治への連続性はある。

有名な重野安繹の言葉がある。「出世に関係する。あそこ (昌平坂学問所) を及第すると履歴になりますからな」(『旧事諮問録』, 重野安繹は、薩摩藩出身で、昌平坂学問所の書生寮で学んでいたのである。その後、薩英戦争後の交渉も担当した。『旧事諮問録』編纂時は東京帝国大学文科大学国史学科の教授であった。)端的に言えば、出世、履歴、あるいは立身のために、昌平坂学問所で学んでいたのである。そうならば、1790 年代に始まる日本のメリトクラシーの開幕は、1870 年代に開幕するイギリスよりも長い歴史を持つ。あまりにも大胆すぎる仮説であろうか。

江戸幕府後期の能力主義に基づく人材登用・昇進は、これまで、日本史学における海防、開国の研究の中で、最も多く指摘されてきた。石井孝の『日本開国史』(1972) は、その先駆的な研究である。「幕府は、日米和親条約の調印を機として、開国政策の採用に踏みきったが、この時点から、対内的にも改革政策を推進していった。この対外的・対内的新政策の立案・実施は、もはや三奉行 (寺社・江戸町・勘定) を中心とする旧来の幕府有司がよくなしうところではない。こうした段階にあって、新政策を推進したのは海防掛を形成する諸有司であった。」

嘉永 6 (1853) 年、ペリーの第一回来航に対して、幕府は事前に情報を把握しており、準備がなされていた。さらに、安政元 (1854) 年、第二回来航において、日米和親条約の締結交渉が行われた。

諸外国船の到来に対して、どのような海防策を採るべきか、また和親条約締結後の開国において、諸外国とどのような外交をするべきか、軍事的対応をいかに準備すべきか。こうした対外関係を担ったのは、幕府の老中阿部正弘を中核とした意思決定機関であり、その実務を担った旗本

あるいは御家人である。後者を、田中(1991)は「開明的実力派吏僚層」と呼んでいる。「海防掛の設置に伴う大目付・目付層と勘定奉行・勘定吟味役を中心とする吏僚層の台頭である。——この人材登用によって登場した開明的な人びとが、以後の幕政の実質的な担い手となる。大小目付層はどちらかといえば急進派、勘定所一派は漸進派というべきか。——幕府の外圧への対応は、この対立・拮抗しつつも、また交錯するこれら開明的実力派吏僚層の動向に左右されるところ大だったのである。」

こうした幕府対外関係の分析は、多く積み上げられ、登用された人材に関する研究も行われてきた。例えば、加藤(1985)は、外国奉行、属僚(組頭、調役など)の分析を詳細に行っている。その中で、学問吟味及第者の動向も明確にしている。海防掛からより上位の外国奉行設置では、最初に任命された五人のうち四人すなわち水野忠徳、岩瀬忠震、堀利熙、永井尚志を論じている(もう一人は井上清直)。水野は「学問により目付に陞せられたのは水野ばかりの稀有の例であった。」また、「永井、堀、岩瀬はいずれも昌平黌学問吟味から目付に進み、海防掛として、あるいは遠国奉行として重要な外交交渉に従事している。」属僚においても、「外国方属僚には学問吟味及第者が少ない。」として、田辺太一、岡崎藤左衛門(安政6年乙科及第、以上)などが取り上げられている。安政5(1858)年、日米修好通商条約が締結された。そして、その年末から、安政の大獄が始まり、それまで、幕府外交の中核を担っていた人々は、その多くが左遷されるのである。

また、最近の上白石(2011B)の研究でも、昌平坂学問所と阿部政権の幕府外交の関連について詳しく分析している。外交関係の人材登用の二つの経路があったとし、第一に、「学問吟味で甲もしくは乙の褒章を受けた者のうち、家格に応じて順調に外交関係の役職に登用される者である。」代表例として、筒井政憲、水野忠徳、井戸鉄太郎(弘道)、永井尚志を挙げる。第二に、「阿部正弘政権の学問所改革と外国奉行という新しい役所の出現によって、優秀な稽古人が学問所教授方出役から外交関係の役職に登用される昇進ルートが完成したのである。」と評価している。具体的に、外国奉行に昇進した人物として、岩瀬忠震、向山黄村(一履)、塚原昌義、土屋正直を挙げている。また、外国奉行の下役に登用された人物として、乙骨彦四郎(耐軒)、田辺太一、松本房之助(寿太夫)を挙げている(彼らはいずれも御家人出身である)。

一方、経営史学の見方についても、少し述べておきたい。これまで経営史学では、江戸期の人事政策について、多くの研究成果がある。ところが、そのほとんどは、比較的規模の大きい商家における人事政策を対象としているのである。幼少の丁稚奉公に始まり、徐々に昇進の階梯を上昇する、その中で競争があり、脱落者は離職するという姿である。しかし、その場合は、学校教育が前提となっていない。公的な試験を経た登用という段階がない。そして、明治以降の企業において、学卒採用が広まると、江戸期の商家の人事政策は衰退していくのである。

例えば、『シオノギ百年』(1978)では、次のような人事政策の変化が描かれている。「(大正9年)二代社長に就任した塩野義三郎は、三十八歳の男盛りで、つね日ごろ考えていた改革を推進

していった。すなわち、丁稚制度の廃止－学校出の採用－住込制度の廃止－業務規程の制定であった。」義三郎は、内部からの強い反発を押し切って、小学校卒業者のかわりに、甲種商業学校（現在の商業高校）の出身者を採用しはじめたのである。本稿で言えば、学問をふまえた能力主義に基づく人事政策の採用である。

また、竹内 (1999) では、「日本の組織は、武士の系譜と商人の系譜がある。組織人の原型を江戸時代の官僚としての武士とみる見方はひとつである。もうひとつは、商家の使用人を組織人の元祖とみる見方である。官庁や会社などの明治以後の日本の組織はこのどちらかを模写している。それぞれを武士型組織と商家型組織と命名することができる。紳士型と前垂れ型と呼んでもよいであろう。官庁などは武士型組織，中小企業などが商家型組織だった。大企業は両者の中間だった。」と述べている。

中小企業に商家型組織が残り，学卒者の採用によって大企業は商家型から徐々に武士型組織へ移行していったとみることもできよう。こう理解すれば，官庁・大企業そして軍人の組織の人事政策の起源は，江戸幕府の武士型組織の人事政策にあることになる。

本稿では，この江戸幕府後期の，メリトクラシーの開幕，すなわち能力主義による人材登用・昇進という人事政策について，外交・海防という局面に限らず，全体の仕組みとして，解明したいと考えている。

筆者は，日本企業の能力主義人事政策は，高度成長期の 1960 年代に形成されたと考えている（詳しくは石井 (2013) など参照）。しかし，その構成要素は，それ以前から存在していたのである（例えば，戦後の労働三法の成立）。重要な構成要素の一つが，「学問→試験→登用」（あるいは「試験→学問→登用」）であり，ここでは，その起源を，江戸幕府後期の人事政策とりわけ御家人を対象として，検討する。

2 先行研究

メリトクラシーの開幕を明治以前に求める研究も，前述したいくつかの研究も含めて，少数ながら存在する。

ドーア (1978) は「日本が近代世界に引きずり込まれる以前にも，この国にはすでにかなり高度に発達した伝統的教育が存在していた。」と指摘する。特に，武士の男児を対象に，中国の古典（儒学）を読むことが中心の教育があった。それは，ヨーロッパのグラマースクールで，ラテン語やギリシャ語の読解を中心にしてきたことと対比される。ドーアは，明治以降日本の教育は大きく変化したと見ているが，江戸期の教育の発達にも重要性を認める。江戸期の世襲制と実力主義との相克についても検討を加えている。実力主義として求められる能力は，当初武芸であったが，次第に学問あるいは行政能力（文書能力）へと変化していった，としている。

笠谷 (1993) および笠谷 (2005) は足高制，学問吟味の成績をもとにした番入り，養子制度，御家人株の売買を取り上げている。そして例えば「足高制という確固たる制度の裏付けをもって，

そして能力主義による昇進の原理が組織内において承認されることによって、必然的な形で実現されていた」と評価する。

辻本(1988)は「知識層と官僚層の関係は、阿部正弘政権の人材登用政策の下で、—— 学問吟味及第者が数多く登用され、特に外国・陸海軍などの新設部門で活動の場を与えられるようになって、さらに新しい段階に達したと言えよう。—— この幕府政治の最後の段階に至って始めて、昌平坂朱子学は幕府官僚制の中に、まがりなりにも確実な根を下ろし、定着した」と評価する。

橋本(1993)は、昌平坂学問所の教育、学問吟味、惣領登用制度に真正面から取り組んだ唯一の研究である。橋本は、「当時の身分制度の原則の枠内での業績主義的登用制度」と評価する。これまでの研究は「近世の日本の試験についての十分な検討を経て出されたものではない」と批判する。

眞壁(2007)は、昌平坂学問所の儒者に、三代にわたって在任した古賀家(精里、侗庵、謹堂)の思想を徹底的に分析した著書である。外交を軸とした政治思想の分析が中心だが、昌平坂学問所出身者、学問吟味及第者の動向も詳細に分析されている。

これらの先行研究はあるものの、橋本、眞壁以外は、数人ないし十数人の事例を挙げて、昌平坂学問所と登用・昇進の関連について述べるにとどまっている。どのような構造で、江戸幕府後期の人事政策が実施されていたかを検証しているものはほとんどない。唯一、橋本の研究があるだけである。

石井(2009)の前稿では、とくに橋本の研究をふまえて、御家人に焦点を定めて、検討した。御家人を対象としたのは、旗本の場合、もともと家格が高い者もあり、学問吟味及第と登用・昇進の関連が必ずしも明確にならないからである。能力を評価されたのか、家格によるのか、明らかではないということである。そこで、御家人を対象とし、学問吟味及第者の登用・昇進について検討したのである。この研究は、昌平坂学問所での学問、学問吟味の内容に重点を置いているのではない。学問吟味の及第者が、その後どのように登用・昇進していったかということに関心がある。江戸幕府後期の人事政策の研究なのである。

前稿では、寛政・享和・文化における、御家人の第二回から第六回の学問吟味の及第者について、登用・昇進の状況を、諸資料に基づいて分析した。本稿では、文政から幕末まで、第七回から第十六回までの、御家人の学問吟味及第者の、登用・昇進の状況を、諸資料に基づいて分析する。

3 文政—安政の学問吟味の概況

『昌平学科名録』には、第二回寛政6(1794)年から、第十八回元治2(1865)年までの、およそ70年間の学問吟味の甲科及第・乙科及第者の一覧が掲載されている。及第当時の肩書と及第後の消息のメモも記載されており、おおむね正確である。(なお、寛政4年の第一回は実施されたが、試験の評価基準が定まらず、不首尾に終わった)

表 学問吟味及第者数時期別推移

	和暦	西暦	甲科及第		乙科及第		計		総計	丙科及第
			以上	以下	以上	以下	以上	以下		
第二回	寛政6年	1794	4	1	5	9	9	10	19	28
第三回	寛政9年	1797	2	0	17	4	19	4	23	12
第四回	寛政12年	1800	2	0	18	7	20	7	27	21
第五回	享和3年	1803	5	2	13	9	18	11	29	26
第六回	文化3年	1806	3	3	14	11	17	14	31	33
小計									129	
第七回	文政元年	1818	2	1	8	3	10	4	14	28
第八回	文政6年	1823	3	2	9	5	12	7	19	18
第九回	文政11年	1828	4	0	10	1	14	1	15	20
小計									48	
第十回	天保4年	1833	1	1	4	2	5	3	8	10
第十一回	天保9年	1838	2	2	7	2	9	4	13	17
第十二回	天保14年	1843	3	2	13	12	16	14	30	36
第十三回	弘化5年	1848	2	2	15	7	17	9	26	30
第十四回	嘉永6年	1853	1	2	24	11	25	13	38	37
第十五回	安政3年	1856	1	3	33	15	34	18	52	55
第十六回	安政6年	1859	2	2	29	15	31	17	48	40
小計									215	
第十七回	文久2年	1862	1	2	32	17	33	19	52	42
第十八回	元治2年	1865	2	1	18	16	20	17	37	20
小計									89	
総計			40	26	269	146	309	172	481	

注：第一回は不首尾に終わった。

出所：「昌平学科名録」

及第者の集計は、表の通りである。甲科及第 66 名（御目見以上 40 名，以下 26 名），乙科及第 415 名（以上 269 名，以下 146 名），総計 481 名である。うち当主は 208 名，嗣子（旗本は惣領，御家人は忝）202 名，嗣子以外の子弟（厄介）71 名である。及第時点の立場であり，当主，嗣子であっても，養子の場合も多い。

なお，学問吟味は，幕臣（旗本・御家人）を対象としたものである。また，丙科及第については，人数は記録されているが，名前は『昌平学科名録』に掲載されていない。褒詞だけであり，学問吟味再受験が可能であった。

受験者については，断片的資料しかないが，『昌平坂学問所日記』において，ある程度わかる。例えば，第十三回弘化5年（嘉永元年，1848年）正月の『昌平坂学問所日記』では，十六日「初場，試人百六十八人」となっている。初場とは，基礎的な試験である。その後，廿日「経科前場ノ上読巻，経科前場試人百六十二人」，廿一日「経科後場試人百四十七人」，廿五日「歴史科，試人百三十三人」と連日行われている。読巻，文章科，時務策は，同時に行われるのではなく，分

散して行われている。二月廿九日に「考試御用向大概相済」となっているから、一ヶ月半もかかったのである。その結果、甲科に永井岩之丞、田辺定輔など4名、乙科に22名が及第となったのである。初場が168人受験であったから、倍率6.5倍の厳しい試験である。

学問吟味は、第六回文化3(1806)年と第七回文政元(1818)年において、12年間のブランクがある。これは、財政的理由などにより、学問吟味が実施されなかったのである。また、中断以前は三年に一回だったのに対し、中断以降は五年に一回の実施に変更された。第十五回安政3(1856)年から、再び三年に一回の実施となった。

当初の学問吟味の受験者は、昌平坂学問所での教育を受けて、学問吟味を受験したわけではない。広く幕臣から、有能な人物の発掘につとめようとしたものである。例えば、著名な遠山金四郎景晋(町奉行遠山金四郎景元の実父)は、第二回学問吟味(寛政6年)甲科及第だが、その時44歳である。同じ回に、御家人として唯一の甲科及第の大田直次郎(南畝、蜀山人)は46歳であった。試験は行われたが、学校一試験という過程ではなかったのである。遠山景晋は、文化期の海防政策で活躍する。文化人として一流の存在であった大田直次郎は、幕臣としての職務に励み長崎勤務など重要な職務を果たすが、支配勘定という御家人止まりであった。

寛政12年の第四回学問吟味の及第者が、昌平坂学問所で教育を受け、学問吟味に及第した最も初期の人々であると推測できる。再開後の第七回文政以降になると、そのことはより明確になってくる。

4 仕組みの検討

(1) 昌平坂学問所

もともと幕府の儒者である林家の私的な学寮であった湯島の聖堂における教育機関は、松平定信の寛政改革によって、その性格を大きく変化させた。柴野栗山(天明8年)を招聘し、岡田寒泉(寛政元年)を儒者に抜擢し、寛政2(1790)年に林家に朱子学擁護の達を伝えた。いわゆる寛政異学の禁であるが、これは幕府の教育機関のカリキュラムを朱子学と定めたことである。寛政4年に学舎を新築し、尾藤二洲(寛政3年)、続いて古賀精里(寛政8年)を儒者として招聘した。また、寛政5年に林家の後継者として、美濃岩村藩主の子である松平熊蔵を養子に迎え、大学頭林述斎として、職に任じた。寛政4年に実施した第一回学問吟味は不首尾に終わったが、寛政6年の第二回学問吟味以降は定着した。また、15歳未満の素読吟味もあわせて実施している。いわば、昌平坂学問所は、幕臣養成のための高等教育機関へと位置づけられていったのである。

寛政9(1797)年に、林家の家塾を切り離し、幕府直轄の学問所が成立した。地名から昌平坂学問所と称されている。旗本・御家人を対象とする寄宿生(寄宿稽古人)・通学生(通稽古人)を対象とした講義が行われている。一方、一般の聴講も認められた仰高門日講や、各藩からの学習者や浪人を対象とした書生寮も設置された。ただし、学問吟味を受験できるのは、旗本・御家人の幕臣だけであり、幕府教学機関としての目的が、幕府の人材育成にあったことはいままでのま

い。昌平坂学問所への入学は、随時行われ、紹介人が必要であり、儒者による個人面接で、学問の能力を確認し、入学が許可された。(書生寮の名簿は残されているが、旗本・御家人の幕臣の稽古人の名簿は残されていない。『昌平坂学問所日記』の登場人物が、もっとも参考となる)

また、学問だけではなく、林述斎を中核に、『寛政重修諸家譜』などの幕府の多くの編纂・出版の主体となった。いわば研究機関であり、幕府のシンクタンクであった。

(2) 学問吟味

やや繰り返しになるが、学問吟味は、江戸幕府が、旗本・御家人およびその子弟などを対象として、昌平坂学問所で実施した儒学の試験である。第二回の寛政6年の学問吟味から定着し、以降しばらくは三年に一回実施された。甲科及第・乙科及第・丙科及第があり、甲科・乙科には、褒賞が与えられた。丙科は褒詞だけであり、再受験も認められた。逆に言えば、丙科の評価は低かったということである。

昌平坂学問所で教育を受けたものだけではなく、すでに職務に就いている当主も受験している。試験は、初場は『小学』など基礎について、次いで『大学』『中庸』などの経義、歴史、文章などの試験が行われた。

文化3年から文政元年までは、財政的理由などで12年間の中断があったが、第七回の文政元年から再開され、五年に一回行われた。さらに、第十五回の安政3年からは、三年に一回となり、第十八回の元治2(1865)年までの実施が確認できる。大政奉還後の第十九回の慶應4(1868)年も行われたようである。ただ、『昌平学科名録』は、元治2年までしか収録されていない。『昌平坂学問所日記』も、文久2(1862)年までしか遺されていない。

学問吟味の結果は、旗本惣領の番入りに活用された。これに対し、旗本当主、旗本厄介や御家人の優先的登用の慣行は、確立していなかった。しかし、学問吟味及第者の登用・昇進は、立身願望を利用した学問奨励策と評価されている(『江戸幕府大事典』)。

(3) 旗本と御家人

旗本とは、知行高一万石以下で、将軍に拝謁できる御目見以上の家格を持つ幕臣を言う。番方と役方(行政上の役職)からなる。それ以外に無役の者も多く、家禄三千石以上あるいは布衣以上の退職者を寄合、それ以外を小普請と言う。旗本は、五千二百家とされているが、御家人から旗本すなわち御目見以上に昇進する者もいた。また、知行形態は、知行所を与えられる地方取(家禄の高が石表示)、蔵米を支給される蔵米取(家禄の高が俵表示)からなる。基本は、家格によって、家禄は固定されている。

御家人とは、将軍への御目見を許されない幕臣を言う(御目見以下)。幕府の官僚組織の中で、下層官僚として、職務を遂行した。また、町奉行所などの与力・同心も御家人である。幕府の組織が複雑化するにつれ、御家人は増加し、幕末には二万六千人といわれた。御家人でも、家禄が

あり家督相続が可能な譜代席・二半場と、職務に就任している間には職禄を支給される、一代限りの勤めである抱席の区別があった。(旗本と御家人、譜代と抱席の区分は原則であり、細かく見ればさまざまな例外がある)

(4) 番入り

番入りとは、無役(小普請)の旗本が、番方・役方に就くことである。特に、徳川吉宗の享保の改革において、享保9年から、惣領登用制度が行われた。これは旗本の惣領のうち、優秀な者を、当主の在職中に登用することである。本来、親が在任している間は、子が番入りすることはないのだが、能力のある人材を活用するために、学問吟味で及第したなどの理由で、旗本惣領を番入りさせることが行われたのである。その基準は、本人の平素の行い、武芸、学問、父の永年勤続、縁故などであった。ただし、登用先は、家格に応じたもので、家格の低い者が、最初から上位の職に就くことはできなかった。橋本(1993)は「当時の身分制度の原則の枠内での業績主義的登用制度」としている。

しかし、惣領以外の子弟(厄介)および御家人は、この対象ではない。さらに、学問吟味の役割を考えた場合、すでに登用されている当主には、番入りというインセンティブが存在しないことも重要である。

(5) 旗本すなわち御目見への昇進

旗本と御家人の区分は、将軍への御目見が許されるかどうか、にある。御家人から昇進して旗本になることもあった。小川(2006)の研究では、寛政10年に、旗本5158家のうち、1148家が御家人より昇進した家であった。昇進時の家格は、譜代・二半場591家、抱席557家であり、どちらからでも旗本へ昇進する機会があったことがわかる。また、寛政3年の家格令によって、昇進した場合でも、永々御目見以上を申し渡されない限り、旗本は一代限りで、跡継ぎは、御家人に戻ったのである。

例えば、天保9年学問吟味甲科及第(この段階では、御家人、小普請)の森田岡太郎は、学問所教授方出役、学問所勤番などを勤めた後に、嘉永4年甲府の代官となり、永々御目見以上を申し渡されている。その後勘定組頭に就き、万延元年の遣米使節の勘定方として、派遣されたのである。

天保14年学問吟味乙科及第(学問所勤番加藤榮助の悴)の加藤餘三郎は、勘定畑を昇進し、安政5年評定所留役勘定より、代官に就任し、永々御目見以上を申し渡されている。その後も重要な職務につき、丹後守を叙任され、慶應4年には最後の勘定奉行並を勤めた。

また、次に示すように、御家人になる権利は、抱席の御家人株の売買、譜代への養子、欠員への新規召抱えなどがあり、浪人、農民や町人から御家人になることも可能であった。能力による昇進や売買による身分的流動性が、一部とはいえ機能していたのである。そして、何らかの方法

によって御家人となった者あるいはその子孫が、能力による昇進によって旗本になることも不可能ではなかったのである。

(6) 養子

今回対象となった人物には、養子となった事例が極めて多い。加藤の『黒船前後の世界』(1985)に養子についての言及がある。「身分制度というタテの原理は、現実には経済力の序列という、もう一つの原理によって崩れかけていた。崩れかけていたというより、次元の違う複数の序列原理が機能しはじめており、序列が「相対化」されていたと言うべきであろう。その他にも社会における身分制度は、実際には、各種のヨコの原理によっても「相対化」されていた。例えば、当時の社会を貫いていた、もう一つのタテの原理に、長子相続(家督の相続と財産の相続)の原理がある。これに対するヨコの原理がすなわち養子制度である。養子、順養子(弟が子となり家督を継ぐこと)、急養子(家長の死にさいして、急いで養子をとること)、控養子(長男の万一の場合を考えて、あらかじめ取っておく養子)など幾つかの形式があった。本書に登場する人物の、阿部正弘、水戸の徳川斉昭、井伊直弼、堀田正睦などは、いずれも順養子である。また林述斎も養子である。」

橋本(2005)は、「厄介」(二男・三男など)について「武士階級の中でも彼らこそが学習経歴のもたらす恩恵を最も感じる存在が多い」としている。それは、「養家に望まれるように自己の価値を高め、それを示す努力をした」からである。

後述する御家人から旗本へ昇進した今回の対象者のなかでも、養子となったのは、森田岡太郎、蒔田幸一郎、永持亨次郎、伴鉄太郎、齋藤岩次郎、松本房之助などがある。

(7) 御家人株の売買

御家人株とは、御家人の家の相続や役職を勤める権利のことである。抱席の御家人の場合も、隠居するときに届け出ることによって、忝に権利を相続することが、実質的には認められていた。しかし、この権利が、隠居の後任を届け出る時に、株として売買されることがあった。他の幕臣の二三男などの厄介や、浪人・農民・町人などが、株を買い求めることも可能であった。身分制の抜け道といえよう。あるいは、能力の高い人材を登用するための機能と位置づけることもできる。

今回の対象者と推定できる人物に、矢口浩一郎がいる。天保14(1843)年乙科及第の矢口清三郎と同一人物ではないかと考えられる。及第時点では御徒である、嘉永2(1849)年書物御用出役、嘉永4(1851)年甲府学頭出役を経た後、安政4(1857)年長崎奉行支配調役並となり、万延元(1860)年勘定に就任している。ここで、旗本へ昇進したと考えられる。その後も要職を歴任し、慶應4(1868)年最後の目付となる。

ところが、『江戸幕臣人名事典』によれば、矢口浩一郎の祖父矢口久蔵、父矢口半蔵はいずれも

浪人なのである。浩一郎の代になって、御徒として、召抱えられたのである。御家人株を買ったとも考えられる。

(8) 足高の制

足高の制とは、享保改革において、徳川吉宗によって採用された幕府の人材登用政策である。それまでは、それぞれの家禄が前提となっており、家禄の低い者は、重要な役職に就くことはできなかった。そこで、家禄の低い者を、役高の高い役職に就ける場合には、在職期間中に限り、家禄と役高の間の不足分を支給することにしたのである。家禄が低い、能力の高い人材を登用することが、足高の制によって、可能になったのである。また、在職期間が終われば、元の家禄に戻るため、幕府の財政に影響を与えないという側面も重要である。家禄という身分制は維持しつつも、個人の能力を活用して、高い役職で仕事を与えるという仕組みである。

具体的に、今回の対象者について、『江戸幕臣人名事典』によって、足高の制がどのように実施されていたか、幾つか事例を見てみよう。

(a) 蒔田幸一郎 高百俵十人扶持内二十俵御足高五人扶持御足扶持

「昌平学科名録」では、蒔田又次郎となっている人物である。幸一郎は書物奉行を務めた蒔田又三郎の養子となっている。蒔田又三郎が、嘉永5年に歿したので、蒔田幸一郎は、跡をついで小普請となった。天保14年に学問吟味の乙科及第となり、その時点で西丸目付の書物御用出役をすでに勤めていた。その後嘉永7年に小十人へ番入りした。そこで、二十俵が足高となり、五人扶持が足扶持となったのである。その後、安政2年甲府の徳典館学頭へ出役を命じられている。

(b) 永持亨次郎 高千石内九百俵足高

天保14年学問吟味乙科及第である。弘化2年学問所勤番となり、嘉永2年御徒目付、安政元年勘定格と順調に昇進していく。その後、長崎海軍伝習所一期生となる。安政3年長崎奉行支配吟味役（安政5年に支配組頭と役名変更）となり、海防の第一線に抜擢され、永々御目見以上となる。万延2年布衣を許され、高百俵に加増された。永持亨次郎は、若くして登用され、活躍した人物であり、加増されて百俵となった家禄に、九百俵もの足高となっている。

5 御家人及第者の昇進についての実証分析

旗本については、家格の高い及第者もあり、最初の番入りが家格によることから、昇進が家格によるのか、学問吟味の及第などの本人の能力によるのか、必ずしも明確にはならない。

しかし、御家人については、家格による登用ということはない。御家人が登用されるのは、ま

さに抜擢であり、本人の能力に基づく以外にはない。純粹のメリトクラシーなのである。

御家人の旗本への昇進について、石井前稿(2009)では、寛政6(1794)年—文化3(1806)年の5回の学問吟味(中断以前)において、及第となった46名について、その後の経歴を分析し、29名について資料を得た。その結果、7名が旗本へ昇進したと推測された。そのうち、鈴木榮蔵は、父八兵衛が旗本に昇進した後に番入りしている。他の6名も及第時期が早く、昌平坂学問所で学んだかどうか、明らかではない。その結果、前稿の結論としては「御家人の、寛政—文化の時期の昌平坂学問所での学習、学問吟味受験のモチベーションとして、及第後の登用が明確になっていたのかどうか、ここまでの調査では、結論を出しえない」とした。

そこで、本研究では、文政元(1818)年(再開)以降安政6(1859)年までの10回およそ40年間の学問吟味における御家人(御目見以下)の及第者のその後の経歴について検討する。この間の御家人の及第者は、甲科及第17名、乙科及第73名、計90名である。この90名について、及第以降の経歴に関わる情報を収集したのである。『昌平学科名録』『柳宮補任』『江戸幕臣人名事典』『昌平坂学問所日記』が多くの情報を提供する。さらに、その他の関連資料から情報を収集し、補足した。

御家人の及第者の登用・昇進について、最重要な指標は、御目見を許されるか、である。すなわち、旗本への昇進である。以下、各回の学問吟味の及第者の旗本への昇進の達成、その後の主要な経歴について、資料にある限り、記述する(一部は、明治以降についても記述した)。あらかじめ、資料の限界があることを御断りしておきたい。資料が見つけれず、旗本への昇進を、見落としている可能性もある。

(1) 第七回 文政元(1818)年

旗本では、宮崎太一郎(次郎太夫、成身)、鈴木八三郎(養子となり、設楽八三郎能潜、勘定吟味役海防掛、代官など歴任)が乙科及第である。

御家人では甲科及第1名、乙科及第3名である。このうち、旗本への昇進が推測されるのは、甲科の白石由郎である。この人物の子が、代官、外国奉行、神奈川奉行などを歴任し、下総守に叙任された白石千別(忠太夫、嶋岡)と考えられる。『江戸幕臣人名事典』では、白石千別の父は白石十太夫、祖父は忠太夫(御普請役)となっている。『昌平学科名録』では、由郎の父が御普請役忠太夫となっており、十太夫と由郎は同一人物であると推測できる。白石十太夫は天保14年勘定より勘定組頭になっており、すなわち高350俵役料100俵の旗本に昇進したということである。この時に永々御目見以上ともなっている。

『学問所日記』文化10(1813)年9月19日において、「南二階世話心得介堀真太郎代佐藤富太郎、小山千一郎代白石由郎」となっている。それに付記があり、重要と思われる。「但御目見以下世話心得介ニハ是迄羽織席之者申渡無之、由郎儀始而之儀ニ付外世話心得と名目も違ひ候様いたし度段世話心得より申出候ニ付祭酒へ申談候所、右之通可然と被申聞候ニ付世話役並と書付為認相違

候」白石由郎は、羽織席として、初めて世話心得介に任命されたのである。羽織席とは、御家人の中でも式日の着衣が羽織と定められた、主に抱席のことである。こうした前例のない任命について、祭酒すなわち林述斎の了解を得たのである。このように、徐々に能力のある者を評価していく仕組みが出来上がっていく。

白石由郎は、文政以降では、初めての学問吟味及第者の旗本昇進となった。

(2) 第八回 文政6 (1823) 年

旗本では、井戸鉄太郎(弘道, 石見守)などが甲科及第である。井戸はペリー来航時の浦賀奉行(後大目付)である。乙科では、松崎満太郎(柳浪, 儒者, 日米和親条約の交渉担当者の一人)、飯室清次郎(稲葉家に養子入り, 正申, 出羽守, 目付海防掛から長崎奉行)などがいる。

御家人では、甲科及第2名、乙科及第5名であるが、旗本に昇進したと推測できる者はいない。

重要な人物は、乙科及第の鳥羽彦四郎である。乙骨家に養子入りし、乙骨耐軒として著名な学者、詩人である。学問所の教授方出役を長く勤め、天保14(1843)年甲府徳典館に学頭として、派遣されている。文化3(1806)年生まれ、安政6(1859)年54歳で歿している。安政5年亡くなる直前に、天守番となるが、この職は、御家人の最上位の職といえよう。学問所には、多大な貢献をした人物だが、結局旗本にはなれなかったと推測できる。また、漢詩人としても有名である。海防畑で活躍した向山黄村(一色栄五郎)の師である。

他に、永持亨次郎の実父柴田順蔵(あるいは甚蔵)が、この回の乙科及第者である。柴田順蔵の長男柴田剛中(貞太郎, 日向守)は、外国奉行などを歴任した。

(3) 第九回 文政11 (1828) 年

旗本では、小貫義之助(龜里家へ養子入り)などが甲科及第である。また、筒井平右衛門, 杉原平吉(平助, 心斎, 儒者), 戸田卓太郎(寛十郎, 氏榮, 伊豆守)などが乙科及第である。戸田は、井戸と同じくペリー来航時の浦賀奉行である。

御家人では、乙科及第1名だけである。

文政年間の及第者で、旗本に昇進したのは、勘定組頭になった白石由郎だけであると推測される。この時期は、まだ、御家人の人材登用の兆しが出始めた段階である。

(4) 第十回 天保4 (1833) 年

旗本では、小花和銈次郎, 松平謹次郎, 北村彌門などが乙科及第である。

御家人では、甲科及第1名、乙科及第2名である。このうち、2名が旗本に昇進している。

(a) 甲科及第の木村金平(裕堂, 蔚)は、弘化2年および弘化4年、甲府徳典館学頭として派

遣されている。その後、嘉永7年学問所勤番組頭から儒者見習となり、安政2年儒者となった(安政6年歿)。学問所勤番組頭は、高150俵手当7人扶持の旗本である。御家人から学問所儒者に登用されたのは、友野雄助(霞舟)に次いで二人目である。

- (b) また、乙科及第の小林栄太郎は、小十人へ番入り、弘化5年甲府徳典館学頭として派遣されている。その後、嘉永4年奥儒者見習、安政2年両番格(ここで奥儒者か)、安政3年布衣となっている。(慶應元年歿)ただ、小林栄太郎は、本人の能力だけで、御家人から小十人へ番入りしたわけではないと考えられる。及第時点で、勘定吟味方改役並(御家人)であった父小林藤之助が、その後代官となり旗本へ昇進したのである。従って、旗本惣領として、小十人へ番入りしたと考えられ、本人が御家人から昇進したわけではない。父小林藤之助は文久2年に隠居しているので、それまでは、親子とも登用されていたのである。しかし、番入り以降、奥儒者へと登用されたのは、本人の学問の能力を評価されたものであろう。

木村金平、小林栄太郎は、ともに学問の能力によって、儒者・奥儒者という旗本へ昇進したと評価して差支えないであろう。しかし、この回の及第者の旗本昇進は、まだ学問の能力の評価にとどまっている段階ともいえる。

(5) 第十一回 天保9 (1838) 年

旗本では、向山源太夫(向山黄村の養父)等が甲科及第である。乙科及第には、水野甲子二郎(忠徳、筑後守、外国奉行など歴任、勘定派の対外交渉の最大の実力者)、久貝金八郎などがある。御家人では、甲科及第2名、乙科及第2名である。

前述した甲科及第の森田岡太郎(桂園)は、御家人としては画期的な昇進をした人物である。文化9(1812)年生まれ、文久元(1861)年50歳で歿している。もともと大城氏の出で、森田家に養子で入ったのである。及第後ただちに、学問所教授方出役となり、天保10年学問所勤番となった。最初は学問の能力を評価されたのだが、嘉永4年に代官(出羽、甲斐、摂津・河内・和泉など)となっている。ここで、永々御目見以上となる。安政5年勘定組頭となっているから、勘定畑の経歴と推測できる。『昌平学科名録』には、「御代官、御勘定組頭ニ成有名」と記されている。

そして、万延元年の初めての遣米使節に、勘定の責任者として抜擢されるのである。その前年「アメリカ国ニ派遣ニ付、別段之訳以布衣被仰付、百俵高ニ御加増成下」(『柳営補任』)と、高い処遇をされている。帰国後も「亜国江罷越骨折候ニ付、金七枚、時服二、御扶持方十人フチ被下」と評価されている。しかし、アメリカ行き疲れからか、翌文久元年死去した。

学問の能力の評価から勘定畑へ、そして外国使節と抜擢された森田岡太郎は、その後続く御家人からの人材登用の先駆けとなった人物である。「亜行日誌」という遣米使節の詳細な記録を遺している。

他に、乙科及第の榎本愛之助(弘化5年甲府徽典館学頭)などがある。

(6) 第十二回 天保14(1843)年

水野忠邦の天保の改革が失敗し、阿部正弘が老中首座に就いた年である。この回から、学問所出身者の人材登用が本格化する。まず、この回より、全体の及第者が急増している。天保4年8名、天保9年13名に比し、この回は御目見以上16名、以下14名、計30名である。及第者の人材登用についても、大きく方針が変化し、積極的に登用が進められることになった。眞壁(2007)は、「特に、嘉永期には、学問所御用筒井(政憲)の推挙を通して、彼ら(教授方出役など学問吟味及第者)の内より阿部政権での各種役職に登庸される者がいた。」と指摘している。筒井政憲は、自身学問吟味及第者であり、町奉行などの要職を歴任した。水野忠邦には冷遇されたが、阿部正弘の外交顧問といえる存在であった。対露交渉では川路聖謨とともに日本の交渉担当を務めた。また、文化7(1810)年から10(1813)年と、弘化2(1845)年から安政元(1854)年の二回、学問所御用を務め、学問所に強い影響力を持っていた。

旗本では、喜多村哲三(後の栗本瀬兵衛、鋤雲、安藝守、遣欧使節)、岡本信太郎(儒者)などが甲科及第である。また、前述の堀省之助(織部正、利熙)、岩瀬愿三郎(忠震、肥後守)、奥村季五郎等が乙科及第である。幕末に活躍した多くの人材が、この前後に学問吟味に及第となっている。

御家人では、甲科及第2名、乙科及第12名である。この14名のうち、半数の7名が旗本に昇進している。旗本に昇進した7名の経歴を概観する。

(a) まず、甲科及第の池田活平である。文久3年学制改革により新設の学問所取締役並から元治元年学問所取締役に就任している。慶応元年甲府徽典館学頭として派遣される。橋本(1993)にも、池田活平は登場する。(元は『日本教育史資料』)ある職に活平を推挙する儒者一同の願が遺されているのである。その中に、「学問御引立の廉に相成り、別て軽輩の者共迄相励可申儀奉存候」すなわち「軽輩一般の学問修業の励みとなる」ということである。まさに、御家人という「軽輩」が学問に励むのは、登用の可能性にあることを、儒者自ら述べているのである。

(b) 乙科及第者について、順不同で述べる。牧左右之助は、養子の牧謹次郎が『江戸幕臣人名事典』に掲載されている。これによれば、養父牧左右之助は勘定であった。勘定は、高150俵の旗本である。また、『柳営補任』では、嘉永3年勘定より材木石奉行出役となり、安政3年材木石奉行本役、永々御目見以上となった牧民助が掲載されている。(万延元年辞任)『江戸幕臣人名事典』では、左右之助の父民助(民介)が、左右之助の学問吟味及第時には支配勘定(御家人)であったが、その後材木石奉行(旗本)に就任している。牧民助が旗本に昇進

したのである。

- (c) 同じく前述した蒔田又次郎は、その後蒔田幸一郎となった人物と推測できる。及第時点では、御徒目付組頭又三郎倅である。実父は、黒沢清次郎という御徒であり、蒔田又三郎の養子となっている。蒔田又三郎が、林奉行となり、旗本に昇進する。その後日光奉行支配組頭、書物奉行を歴任し、嘉永5年歿する。蒔田幸一郎は、同年家督を継ぎ小普請入り、嘉永7年小十人に番入りする。安政2年(あるいは3年)には、甲府徴典館学頭に出世として派遣される(田辺太一と同時)。

乙科及第となった時点で西丸目付の書物御用出役をすでに勤めていた。そして嘉永7年に小十人へ番入りすることができた。

牧左右之助と蒔田幸一郎(又次郎)は、親の旗本への昇進を引き継いだと言える。

- (d) 同じく乙科及第の井浦慎次郎は、井浦慎左衛門と同一人物と推測できる。天保12年家督を継ぎ、及第した天保14年学問所勤番となる。嘉永5年西丸広敷添番となり、同6年本丸勤となる。文久元年和宮御付天璋院御用を兼ねる。ここで、旗本に昇進したのであろう。元治元年学問所教授方出役となる。慶應2年静寛院宮(和宮)御用を兼ねる。

- (e) 前述した乙科及第の矢口清三郎は、矢口浩一郎(正浩、謙斎)と同一人物と推測できる。及第時点では御徒である、この人物の高は、『江戸幕臣人名事典』では、高四百俵内七十俵五人扶持本高三百五俵足高となっている。嘉永2(1849)年書物御用出役、嘉永4(1851)年(あるいは5年)甲府学頭出役を経た後、安政4(1857)年長崎奉行支配調役並となり、安政5(1858)年長崎奉行支配調役、万延元(1860)年勘定に就任している。長崎奉行支配調役で、旗本へ昇進したと考えられる。その後、学問所取締役並、天守番之頭、陸軍奉行並などから、慶應4(1868)年最後の目付となる。

- (f) 前述した乙科及第の永持亨次郎は高千石内九百俵足高である。実父は、柴田甚蔵(順蔵)であり、御徒目付を務めた。実父も文政6年学問吟味乙科及第である。養父は、小普請永持勘之丞である。亨次郎は文政9(1826)年に生まれており、天保14(1843)年及第時点で、すでに小普請となっている。弘化2年学問所勤番となり、嘉永2年御徒目付、安政元年勘定格と順調に昇進していく。その後、艦長候補者として長崎海軍伝習所一期生となる。安政3年長崎奉行支配吟味役(安政5年に支配組頭と役名変更)となり、海防の第一線に抜擢され、永々御目見以上となる。万延2年布衣を許され、高百俵に加増された。文久2年に江戸へ戻り、外国奉行支配組頭となる。元治元(1864)年に京都に派遣され、目付(介)となる。しかし、同年京都で病氣にて、39歳で歿した。永持亨次郎は、若くして登用され、活躍した人

物であり、加増されて百俵となった家禄に、九百俵もの足高となっている。

- (g) 前述した乙科及第の加藤餘三郎（あるいは餘十郎）は、安政4年勘定評定所留役に昇進している。安政5年には、代官となり、永々御目見以上を許されている。元治元年評定所留役勘定組頭になり、布衣を許され、慶應元年勘定吟味役格に昇進する。最後は慶應4年勘定奉行並となり、丹後守に叙任される。

牧左右之助、蒔田幸一郎（又次郎）は、親の昇進に伴う番入りであったとも言える。しかし、彼らを含めて7名もの旗本昇進者が出たということは、この回以降の及第者の旗本昇進において、画期的な人事政策の変更があったといえる。能力主義を求める、あるいは求めざるをえない阿部正弘政権の意向といってもよい。もう一つ付け加えるならば、それまでの旗本昇進者が、甲科及第に限られていたのに対し、この回の7名のうち、池田活平を除く6名は乙科及第であったことである。さらに、その6名は、学問の能力の評価だけでなく、勘定、外交などの実務の世界での昇進であった。

(7) 第十三回 弘化5（嘉永元、1848）年

旗本では、前述の永井岩之丞（主水正、尚志、長崎海軍伝習所初代総監、勘定奉行、大目付、外国奉行など歴任）と妻木傳藏（中務、田宮、儒者、目付から最後の目付）が、甲科及第である。また、乙科及第では木村勘助（喜毅、芥舟、摂津守、長崎海軍伝習所二代総監、万延元年遣米使節咸臨丸提督、軍艦奉行など歴任、最後の勘定奉行）、矢田堀景藏（讃岐守、長崎海軍伝習所一期生、以降海軍で艦長など）、一色栄五郎（後に向山家に養子入り、向山隼人正、一履、黄村、遣欧使節、外国奉行、最後の若年寄など歴任）など多士済々である。

御家人では、甲科及第2名、乙科及第7名である。

- (a) 甲科及第は、冒頭に紹介した田辺定輔（太一、蓮舟）がいる。安政3年甲府御典館学頭に派遣される。文久3年外国奉行支配組頭になった時に、旗本に昇進したのであろう。文久3年外国奉行支配調役並から支配調役、そして支配組頭へと昇進する。元治元年遣外使節の「不束之儀」で御役御免となる。慶應2年外国方手附書翰取扱より、外国奉行支配組頭に再役となり、「通信全覽」を編纂している。慶應4年目付となる。

- (b) 乙科及第では、小川達太郎が、文久2年御徒目付より長崎奉行支配吟味役へと異動している。この段階で長崎奉行支配組頭として旗本に昇進したと推測できる。その後、文久3年に辞任し、小普請入りとなる。元治元年小普請より、代官となる。

計 9 名から、2 名が旗本に昇進している。他に甲科及第に宮本久平がいる。

(8) 第十四回 嘉永 6 (1853) 年

旗本では、永井信太郎(儒者)が甲科及第である。また、乙科及第には、依田克之丞(山城守, 奥儒者), 服部彦一郎(常純, 筑前守, 長崎奉行, 勘定奉行など歴任), 武川五郎次郎(山口家に養子入り, 直毅, 泉処, 信濃守, 目付, 江戸町奉行, 大目付, 外国奉行など歴任), 伊澤謹吾(木下家に養子入り, 大内記, 長崎伝習所, 軍艦奉行並, 外国奉行, 大目付など歴任), 塚原重五郎(昌義, 但馬守, 目付, 外国奉行, 若年寄など歴任, 万延元年遣米使節), 原真三郎(江連家に養子入り, 江連堯則, 加賀守, 目付, 外国奉行などを歴任), 吉田令助(佐野家に養子入り, 儒者)など

がいる。
御家人では、甲科及第 2 名、乙科及第 11 名である。

(a) 甲科及第の塚本桓輔(明毅)は、安政 2 年海軍伝習所に入所し、海軍畑を進む。旗本へ昇進し、慶應 4 年最後の軍艦頭並となる。明治以降も太政官地誌課長などを勤め、地理学・数学など科学に関する多数の著作・翻訳を遺している。太陽暦への転換を指揮し、紀元節の月日の確定を行った。

(b) 乙科及第の伴鉄太郎(桜井家からの養子)も、安政 3 年箱館奉行支配調役並から長崎伝習所二期生として入所し、海軍畑を歩む。万延元年の遣米使節における咸臨丸の測量方である。帰国後、小十人格軍艦操練所教授方頭取出役、文久元年両番上席軍艦頭取、文久 2 年朝陽丸艦長として小笠原開拓に参加している。小十人で旗本へ昇進する。高千石(足高未詳)ともなっており、開成所取締役などを経て、慶應 4 年最後の軍艦頭となる。

(c) 同じく中村釧太郎(正直, 敬字)は、学問所勤番組頭から、安政 5 年甲府学頭を経て、文久 2 年儒者となる。慶應 2 年英国留学生派遣に際して、取締役として同行する。明治以降は、『西国立志編』を訳し、明治以降の最初のベストセラーとなる。東京帝国大学教授、女子高等師範学校長、貴族院議員などを歴任する。天保 3 年生、明治 24 年 60 歳で歿する。

(d) 同じく大久保喜三郎(弥祐, 祐助)は、御徒目付、種痘所頭取などから、学問所取締役並を経て元治元年学問所取締役となった。

13 名のうちこの 4 名は旗本へ昇進している。

(9) 第十五回 安政3 (1856) 年

旗本では、井上彌三郎(蕃書調所頭取)が、甲科及第である。乙科及第には、前述の池田修理(長発、筑後守、目付、外国奉行などを歴任し、遣仏使節正使)がいる。田邊太一も同行した使節の責任者である。また、石川謙三郎(利政、河内守、目付、外国奉行などを歴任し、遣露使節)、新見郁三郎(相模守、学問所頭取)、戸川鉸三郎(伊豆守、大目付)、萬年恒次郎(内田家に養子入り、海軍からオランダ留学、軍艦頭)などが同期である。

御家人では、甲科及第3名、乙科及第15名である。

(a) 乙科及第の田上作左衛門は、蕃書調所勤番組頭から、文久2年小十人になって、旗本へ昇進している。

(b) 西尾升助(忠左衛門)は、文久元年本寿院御用達となり、勘定すなわち旗本へ昇進している。高200俵(本高28俵2斗)と足高が多い。

(c) 齋藤岩次郎は、及第後前述の設楽八三郎の養子となった。実父は、先手与力普請方改役齋藤金之丞で、その次男である。安政5年教授方出役となる。文久元年設楽家に養子入りし、文久2年小納戸に番入りとなる。安政4年の『昌平坂学問所日記』では、5月19日海防掛の川路聖謨、塚越藤助、設楽八三郎が、北楼講を聴聞している。養父の設楽八三郎も学問吟味及第であり、ここで齋藤岩次郎を知ることになった可能性もある。文久2年3-5月には、設楽八三郎は、学問所御用を兼務することとなった。

設楽岩次郎は文久3年外国掛目付となり、備中守に叙任されている。いったん御役御免となるが、慶應3年再び目付となる。慶應3年の長崎における英人殺傷事件の捜索のため、坂本龍馬を取り調べた担当者である(戸川伊豆守も派遣されている)。慶應4年御役御免となる。

齋藤岩次郎は、設楽八三郎の養子となったことで、番入りしたと推測される。

(d) 松本房之助(三之丞、寿大夫)は、元奈良春日社人の子として生まれ、御持筒同心松本善吉(あるいは善左衛門)の養子となる。(一説では、近江の百姓の子として生まれたとされている)及第後安政4年学問所教授方出役となる。さらに、御持筒同心の跡番を務め、安政5年外国奉行支配定役となり、万延元年の遣米使節に抜擢される。帰国後は学問所勤番、徒目付から長崎奉行支配組頭となる。ここで、旗本へ昇進したと推測される。箱館奉行支配組頭を経て、元治元年小十人となる。さらに、慶應2年蕃書調所頭取並となり、永々御目見以上となる。さらに、再度アメリカへ派遣される。その後も、大坂町奉行並、勘定奉行並を歴任する。

(e) 海老原庫太郎は、箱館奉行支配調役並海老原武治(武次)の忝である。『江戸幕臣人名事典』では、高百俵内七十俵五人扶持本高五俵足高外役扶持七人扶持金七十両となっている。安政2年御徒看防番代、安政3年父武治が箱館奉行支配調役になったので、看防勤務は免じられた。安政4年箱館表役所書物御用出役となり、文久3年父と同じく箱館奉行支配調役並となった。役高は、この時のものと推測される。ところが、父武治は、『江戸幕臣人名事典』によれば、慶應2年和宮様天璋院様広敷用達となり、永々御目見以上となるのである。ということは、子の海老原庫太郎も旗本へ昇進した可能性があるということである。

18名中5名が昇進したと推測できる。

(10) 第十六回 安政6 (1859) 年

旗本では、大久保四郎三郎(忠恕、豊後守、目付、長崎奉行、大目付など歴任)、土屋兵庫(正直、豊前守、大目付、外国奉行など歴任)、小出修理(秀実、大和守、目付、箱館奉行、外国奉行、勘定奉行、江戸町奉行など歴任、遣露使節)などが、乙科及第である。

御家人では、甲科及第2名、乙科及第15名である。明治維新まで10年と短い期間しかなく、旗本へ昇進した人物は見当たらない。安政5年末から、安政の大獄が始まり、それまで開国へ向けた外交交渉の担当者たちが、多く左遷されたことも影響しているかもしれない。

第十七回文久2 (1862) 年、第十八回元治2 (1865) 年は、御家人で、それぞれ19名、17名の及第者を出しているが、まもなくの明治維新によって、彼らにとっては幕府瓦解といったほうがよいが、江戸幕府において昇進したものは見当たらない。むしろ、伏見、奥州で討ち死にした者さえいる。また、明治以降に、海軍、陸軍、各種学校教員として就職し、県会議員になった者たちもいる。

結局、文政以降安政までの10回の学問吟味において及第した御家人(御目見以下)は90名であったが、そのうち旗本へ昇進したのは22名であった。そのほとんどが、天保から安政3年の6回の及第者である。(それ以外は、文政元年の白石由郎)この時期が、海防の重要性が高まり、開国へ大きく時代が変わり、優れた人材を登用する必要に迫られていたことが影響していることは間違いない。ただ、繰り返し述べるが、寛政期から、昌平坂学問所、学問吟味が制度化され、その土台の上にはじめてなされたことである。七十年にも及ぶ学問一試験一登用という過程である。とくに文政以降は御家人も登用され、多くの旗本への昇進者を輩出したのである。そのことは、昌平坂学問所で学ぶ御家人のモチベーションを高めたのである。「及第は出世(立身)になる。履歴になる」と、あとに続く御家人たちの目標となったのである。すなわち、江戸幕府後期の人事政策は、日本のメリトクラシーの開幕であり、明治以降の人事政策の起源である。

6 分野ごとの登用・昇進

次に、役職の分野ごとに、昌平坂学問所出身の学問吟味及第者の御家人から旗本への昇進者についてまとめていきたい。

(1) 勘定

御家人から、旗本へ昇進した者の中で、多いのは勘定奉行所勤務である。

勘定奉行は、幕府財政の全てを担当し(勝手方)、また、租税徴収、全国幕領・関八州の私領の公事を担当した(公事方)。勘定奉行支配の役職は、勘定組頭・勘定・支配勘定などがあり、勘定より上が御目見である。また、代官なども勘定奉行の支配であった。

勘定奉行所は、広範囲の行政全般を担っていたと言え、実務能力が重要であった。今回の対象者では、文政元年の白石由郎、天保9年の森田岡太郎が先駆的な昇進を果たしている。白石は勘定から勘定組頭に、森田は代官から勘定組頭に、そして遣米使節となっている。

さらに、天保14年の牧左右之助、加藤餘三郎、安政3年の西尾升助が勘定畑である。加藤餘三郎は、元治元年代官より勘定組頭に昇進し、慶應4年には勘定奉行並まで昇進している。

(2) 学問(儒者など)

学問吟味の及第者の中には、昌平坂学問所教授方出役として、いわば「非常勤講師」の役割を果たすものが多かった。儒者だけでは、学問所の多くの講義・業務をこなすことは困難であり、講義などを、優秀な卒業生である教授方出役に任せることもあったのである。さらには、甲府の徽典館には、学頭として、多くの及第者が交代で派遣されていた。

こうした段階を経て、ごく一部の者は、儒者あるいは儒者見習として登用されている。また、将軍の奥儒者に昇進する者もいた。

天保4年の木村金平は、学問所勤番組頭から、儒者見習、儒者へと昇進した。同年の小林栄太郎は、奥儒者見習から奥儒者へ昇進している。

天保14年の池田活平は、学問所取締役となった。同じく、嘉永6年の大久保喜三郎も学問所取締役となっている。

嘉永6年の中村釧太郎は、学問所勤番組頭から、甲府徽典館学頭を経て、儒者に昇進している。後の中村正直(敬字)である。

また、書生寮に、各藩藩士および浪人の学習者が全国から学びに来ており、昌平坂学問所の教育は全国に影響を及ぼしている。とくに学問(あるいは詩)を通じた交流は、重要な役割を果たした。

(3) 海防

及第者が最も重要な役割を果たしたのは、これまでの研究にも取り上げられているように、海防すなわち外交と軍事である。

弘化2 (1845) 年老中阿部正弘政権によって、大目付・目付・勘定奉行・勘定吟味役からも海防掛が任命され、外交・軍事の職に携わることとなった。近海への異国船の接近などが相次ぎ、従来の対策では対応しきれなくなってきたからである。さらに、嘉永6 (1853) 年のペリー来航、翌年の日米和親条約の締結などの大きな課題に取り組むこととなった。安政年間 (1854-1860) に入ると、目付と勘定奉行・吟味役のそれぞれの海防掛での意見対立が見られるようになった。安政5 (1858) 年新たに外国奉行が設置され、外交を総括する組織が整備されることとなった。外国奉行の支配には、組頭・調役・定役などの役職が置かれた。新設時の外国奉行は、浦賀・長崎奉行を歴任した勘定派の中心人物水野忠徳、箱館奉行から就任した堀利熙、下田奉行から就任した井上清直、急進開国派の中心人物岩瀬忠震、そして長崎から戻った永井尚志の5名であった。井上と岩瀬は、日米修好通商条約の全権である。

外国奉行支配組頭・外国奉行支配調役などは、外交の実務を担う職であった。そして、外国奉行も含めて、多くの学問吟味及第者が登用された。海防の第一線である浦賀奉行所・長崎奉行所・箱館奉行所・下田奉行所・神奈川奉行所などにも、多くの人材が配置された。御家人の及第者からも、永持亨次郎は外国奉行支配組頭、長崎奉行支配組頭、田辺太一は外国奉行支配組頭、小川達太郎は長崎奉行支配組頭、矢口浩一郎は長崎奉行支配調役、松本壽太夫は箱館奉行支配組頭、齋藤(設楽)岩次郎は外国掛目付などに就任し、旗本へ昇進している。

他にも、旗本へは昇進しなかったと見られるが、外交実務職に学問吟味及第の御家人は多数登用されている。例えば、安政3年の新井鉞次郎(外国奉行調役)、宮本小一郎(外国奉行調役)、高松力藏(山崎衡三郎、箱館奉行調役)、齋藤謹吾(元木謹吾、浦賀奉行与力)、小川十太郎(箱館奉行江戸役所書物御用出役、ただし放埒につき小普請入り逼塞)、猪倉辰三郎(長崎奉行調役)、安政6年の吉澤源次郎(外国奉行調役)、若泉次郎(長崎奉行調役)、古谷簡一(箱館奉行支配定役出役)などである。

また、安政2年の長崎海軍伝習所の設立に始まった幕府海軍の創設は、海防に大きな影響を及ぼした。その幕府海軍の中核となった総監の永井尚志、伝習所一期生の艦長候補矢田堀景蔵、永持亨次郎(以下)(艦長候補のもう一人は勝麟太郎)、および塚本明毅(以下)は、いずれも学問吟味及第者である。二期の総監木村喜毅、伊沢謹吾、伴鉄太郎(以下)も及第者である。田辺太一(以下)、内田恒次郎も最後の三期生となった。

7 おわりに

昌平坂学問所で学んだ御家人の学問吟味の及第が、その後の登用・昇進につながったことを示してきた。これまで論じてこなかった二つの論点について、検討しておこう。第一は、及第した

にも関わらず、旗本への昇進がかなわなかった者たちについてである。検討した期間に及第したのは、90名であるが、旗本へ昇進したのは22名であった。他の68名はどうなったのか。資料が不足して、昇進への情報が得られなかった可能性はある。また、海防の実務職において、多くの及第者が御家人として多くの職務についている。あるいは、安政6(1859)年以降の及第者では、明治維新・幕府瓦解によって、昇進する十分な時間がなかったのかもしれない。しかし、それだけではない。死去・病気・不祥事などで、途中で道を断たれた者もいる。

第二の論点は、学問吟味及第でなければ、旗本へ昇進しなかったのか、ということである。実は、及第でなくとも、昇進した者は存在する。それどころか、重要な役割を果たした者もいる。川路聖謨・井上清直の兄弟と勝麟太郎などである。豪農の出身から、遣欧使節に選ばれるに至った渋沢栄一を挙げることもできる。学問吟味及第が、絶対ではなかったという反証には事欠かない。

川路聖謨は、享和元(1801)年幕府直轄領の豊後日田の代官所属吏の内藤吉兵衛の子である。文化5(1808)年父が幕府御家人(御徒)となり、江戸に移った。文化9(1812)年小普請川路家の養子となったのである。支配勘定出役・評定所留役を経て、文政10(1827)年寺社奉行吟味調役、天保6(1835)年勘定吟味役、天保11(1840)佐渡奉行となった。なお、川路および次に述べる井上は、学問吟味の中絶で受験の機会を失した可能性もある。それよりも、勘定畑の実務の能力を買われて、昇進を果たしたと見られる。

井上清直は、川路聖謨の実弟である。文化6(1809)年生まれ、与力井上新左衛門の養子となった。弘化4(1847)年勘定組頭格となり、安政2(1855)年勘定吟味役に進んだ。その年に下田奉行に抜擢されたのである。初代の外国奉行の一人であり、日米修好通商条約の全権の一人である。

また、本稿は江戸幕府後期の人事政策を対象としたが、その時期の全国のほとんどの藩には藩校が設立され、藩士の教育に努めていたことは周知の事実である。藩校の教育には幕府の影響力が強かったと考えられ、それをふまえて各藩の人事政策についても検討すべきであるが、本稿の範囲を超えている。

昌平坂学問所で学び、学問吟味に及第し、江戸幕府で登用・昇進した人物は、明治維新あるいは幕府瓦解によって、職を失った。しかし、本稿で紹介した田辺太一、中村敬字、塚本明毅などは、明治政府からも重用され、多くの仕事をしている。また、本稿では紹介しなかったが、安政3年乙科及第(以上)で奥儒者となった保田鉦太郎は、明治9年設立された秀英舎の創業者の一人である。秀英舎は、現在の大日本印刷である。個々の人びとの、明治以降の仕事を精査することは興味深い、本稿の範囲を超えている。

これまでの経営史学における先行研究との関連では、第一に明治期企業家の出身背景と行動様式の研究との関連がある(浅野(1991)など)。第二に明治期企業の学卒者採用への影響がある。今後の検討課題としたい。

さらに、学問吟味が、中国（当時は清）の科学を意識していたことは間違いがない。長い歴史を持つ科学とは比べようがないが、比較検討することは、日本のメリトクラシーの特徴を分析するためにも有効であろう。ただ、本稿の範囲を超えており、今後の課題としたい。

注

注1：本稿は、「御家人と昌平坂学問所・学問吟味」『北海学園大学学園論集』第140号（2009年6月）の続編である。

注2：経営史学会（於：明治大学，2012年11月3日）で報告した際に、ご意見・ご質問をいただいた、ご出席の先生方に多大なる感謝を申し上げたい。

参考文献

- 浅野俊光（1991）『日本の近代化と経営理念』（日本経済評論社）
- 石井 耕（2009）「御家人と昌平坂学問所・学問吟味」『北海学園大学学園論集』140号
- 石井 耕（2013）『企業行動論 第3版』（八千代出版）
- 石井 孝（1972）『日本開国史』（吉川弘文館）
- 石川 謙（1960）『日本学校史の研究』（日本図書センター，1977年復刊）
- 石川忠久（1998）「序」『昌平坂学問所日記Ⅰ』（財団法人斯文会）
- 磯田道史（2002）「幕末維新期の藩校教育と人材登用 — 鳥取藩を事例として —」『史学（慶應義塾大学）』第71巻第2・3号
- 井上勝生（2002）『開国と幕末変革』（「日本の歴史18」，2009年，講談社学術文庫）
- 岩波書店（1999）『岩波 日本史辞典』（岩波書店）
- 大石学編（2009）『江戸幕府大事典』（吉川弘文館）
- 大久保利謙編集 江戸旧事采訪会編（1980）『江戸 第二巻 幕政編（二）』（「昌平学科名録」収載，立
体社，原著は江戸期）
- 大田直次郎（1979）「科場窓稿」『蜀山人全集 第二巻』（日本図書センター，原著は江戸期）
- 小川恭一編（1989）『江戸幕府旗本人名事典』（原書房）
- 小川恭一編（1998）『寛政譜以降旗本家百科事典』（東洋書林）
- 小川恭一（2003）『江戸の旗本事典』（講談社文庫）
- 小川恭一（2006）『徳川幕府の昇進制度 — 寛政十年末旗本昇進表 —』（岩田書院）
- 加藤祐三（1985）『黒船前後の世界』（岩波書店）
- 加藤祐三（2004）『幕末外交と開国』（2012年，講談社文庫）
- 笠谷和比古（1993）『土の思想 日本型組織・強さの構造』（日本経済新聞社）
- 笠谷和比古（2005）『武士道と日本型能力主義』（新潮社）
- 上白石実（2011 A）『幕末の海防戦略』（吉川弘文館）
- 上白石実（2011 B）『幕末期対外関係の研究』（吉川弘文館）
- 木村紀八郎（2011）『軍艦奉行木村摂津守伝』（鳥影社）
- 旧事諮問会編（1890）『旧事諮問録（上）（下）』（1890年は第一回の会の開催年，進士慶幹校注，1986年
第1刷，岩波文庫）
- 熊井 保・大賀妙子編（1989）『江戸幕臣人名事典第一巻 — 第四巻』（新人物往来社，原著は江戸期）
- 熊倉功夫（1976）「化政文化の前提 — 寛政改革をめぐる —」林屋辰三郎編『化政文化の研究』（岩波
書店）
- 黒板勝美，国史大系編修會（1966）『続徳川実紀 第二篇』（『国史大系 49巻』吉川弘文館，原著は江戸
期）

- 坂口筑母(1983)「天保下級武士 幕府昌平校 詩人と生活思想——「慷慨」「学問」「自由」への帰結——」『季刊日本思想史』第21号
- 塩野義製薬(1978)『シオノギ百年』(塩野義製薬)
- 高橋章則(1989)「近世後期の歴史学と林述斎」『日本思想史研究』21号
- 竹内誠・深井雅海編(2005)『日本近世人名辞典』(吉川弘文館)
- 竹内 洋(1995)『日本のメリトクラシー』(東京大学出版会)
- 竹内 洋(1999)『学歴貴族の栄光と挫折 日本の近代(12)』(中央公論新社)
- 竹内 洋(2005)『立身出世主義 増補版』(世界思想社)
- 田中 彰(1991)「解説 「黒船」来航から岩倉使節団へ」『開国 日本近代思想大系(1)』(田中彰編, 岩波書店)
- 田辺太一(1988)『幕末外交談1・2』(『東洋文庫69』初版1966年, 訳者坂田精一, 平凡社)
- 玉林晴朗(1944)『蜀山人の研究』(東京堂出版 1996年4月復刊)
- 塚本 学(2012)『塚本明毅』(ミネルヴァ書房)
- 辻本雅史(1988)「十八世紀後半期儒学の再検討 折衷学・正学派朱子学をめぐる」『思想』766号
- 辻本雅史(1990)『近世教育思想史の研究 日本の「公教育」思想の源流』(思文閣出版)
- 辻本雅史(1999)『「学び」の復権』(岩波現代文庫, 2012年)
- 辻本雅史(2002)「幕府の教育政策と民衆」辻本雅史・沖田行司編『教育社会史 新体系日本史16』(山川出版社)
- 辻本雅史(2011)『思想と教育のメディア史』(ペリカン社)
- 土居良三(1997)『幕末五人の外国奉行』(中央公論社)
- 東京大学史料編纂所編纂(1964-70)『柳営補任一巻～六巻, 索引上・下』(『大日本近世史料』, 1983年覆刻版, 東京大学出版会, 原著は江戸期)
- 徳川実紀研究会編(1972)『徳川実紀索引 人名篇 上巻・下巻』(吉川弘文館)
- ドーア, R. P(1970)『江戸時代の教育』(松居弘道訳, 岩波書店)
- ドーア, R. P(1978)『学歴社会新しい文明病』(松居弘道訳, 岩波書店)
- 橋本昭彦(1993)『江戸幕府試験制度史の研究』(風間書房)
- 橋本昭彦(1994)「幕府直轄学校と藩邸内学校」『東京都教育史 通史編一』
- 橋本昭彦 財団法人斯文会編(1998, 2002, 2006)『昌平坂学問所日記I-III』(財団法人斯文会, 原著は江戸期)
- 橋本昭彦(2003)「第三章 官学への転換期における林家塾昌平校の実態」『幕末維新时期漢学塾の研究』(生馬寛信編, 溪水社)
- 橋本昭彦(2004)「近世武士階級のライフコースにおける学習の重み——研究ノート——」『近世日本における生涯教育システムの成立と発展に関する全体論的研究 I』(高木靖文編, 幕末維新时期学校研究会)
- 橋本昭彦(2005)「江戸時代の武士にとっての学習経歴の重みについて——幕臣の次男三男等の事例から——」『近世日本における生涯教育システムの成立と発展に関する全体論的研究』(高木靖文編, 幕末維新时期学校研究会)
- 馬場憲一(1975)「勘定奉行・勘定吟味役の昇進過程に関する一考察」『法政史学』第27号
- 福井 保(1980)『内閣文庫書誌の研究 日本書誌学大系12』(青堂書局)
- 福井 保(1983)『江戸幕府編纂物解説編』(雄松堂出版)
- 福井 保(1985)『江戸幕府刊行物』(雄松堂出版)
- 藤田 覚(1992)『遠山金四郎の時代』(校倉書房)
- 藤田 覚(2005)『近世後期政治史と対外関係』(東京大学出版会)
- 眞壁 仁(2007)『徳川後期の学問と政治』(名古屋大学出版会)
- 松崎謙堂(1983)『謙堂日暦1-6巻』(山田琢訳注, 『東洋文庫』, 平凡社, 1983年, 原著は江戸期)
- 松沢裕作(2012)『重野安繹と久米邦武』(山川出版社)

- 宮崎成身（1986）『視聴草』（福井保解題『内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第二』汲古書院，1986年，原著は江戸期）
- 森潤三郎（1933）『紅葉山文庫と書物奉行』（臨川書店，1978年複製版）
- 文部省編（1980）『日本教育史資料第七巻』（1980年，臨川書店複製版第2刷，原著は明治期）
- 山本博文（2005）「幕府の昇進試験「学問吟味」の始まり」遠山美都男・関 幸彦・山本博文『人事の日本史』（毎日新聞社，その後新潮文庫）
- ヤング，マイクル（1958）『メリトクラシー』（窪田鎮夫，山元卯一郎訳，1982年翻訳出版，至誠堂）